

百年後から見たバンクーバー暴動

——暴動関連日本語史料の整理と分析を中心に——

和泉真澄

はじめに

2007年9月7日と8日の両日、カナダのバンクーバー市において、「The 1907 Race Riots and Beyond: A Century of TransPacific Canada (1907年人種暴動とその後—太平洋カナダの百年)」をテーマとする学会が開催された。アカデミアとコミュニティ団体の両方を巻き込んだこのイベントは、1907年9月7日にバンクーバー市で発生したアジア人排斥暴動の百周年を記念する催しの一環であった。学会は、バンクーバーのダウンタウンにあるサイモン・フレーザー大学のハーバーセンター・キャンパスを会場とし、サイモン・フレーザー大学 (SFU) とブリティッシュ・コロンビア大学 (UBC)、およびビクトリア大学 (UVic) の三大学の共同企画として開かれた¹⁾。

会議の中心テーマは1907年アジア人排斥暴動であったが、その開催にはいくつかの異なる意図が含まれていた。学問的観点からの意図の一つは、カナダ、アメリカ、アジアから研究者を集め、バンクーバー暴動を20世紀初頭のアジア人の国際移動とグローバルな人種秩序の構築という世界的コンテクストに置いて再考することであった。これは単に暴動に関するこれまで知られていなかった事実を掘り起こすのみならず、この暴動が生み出されたローカルな文脈を、人種・労働・ジェンダー関係などから見直すことによって、カナダの人種関係史を振り返るといふ、カナダにおけるアジア移民やアジア系市民の歴史研究分野が現在取り組んでいる主要命題を反映している。さらに、アジア出身の留学生や研究者の参加を奨励することによって、学会では日本語や中国語、フランス語など英語以外の言語による史料や、バンクーバー以外の地域に存在する暴動に関する記録の発掘に関する発表が行われた。ここには、英語資料のみに基づいていた暴動に関するこれまでの学説を覆し、今までの歴史的知識に反映されてこなかったエスニック・コミュニティやマイノリティ、外国からの声を反映させようという学会の意図も明確に見ることができる。プログラムについては後に改めて紹介するが、ローカルとグローバルをつなぐこれらのアカデミックな意図は、会議のなかである程度の成功を見たと言える。

また、この会議のさらなる特徴は、学問的知識と各種の地元コミュニティ活動団体との連携を模索していたことにあった。学会一日目、すなわち暴動勃発の記念日でもあった9月7日の夕刻には、「中国系カナダ人歴史保存協会 (Chinese Canadian Historical Society)」や「全カナダ日系人博物館 (National Nikkei Museum & Heritage Centre)」、南アジア系カナダ市民が主導する「駒形丸事件保存基金 (Komagata Maru Heritage Foundation)」などの団体が協力し合い、百年前の暴動と同じルートを歩くウォーキング・ツアーが行われた²⁾。ツアーには延べ二百名以上の人々が参加した。その後にチャイナタウンで催された「和解のための夕食会 (Reconciliation

Dinner)」には七百名以上が招待され、これらのイベントを合わせると、百名ほどの参加者を見た学会よりもはるかに規模の大きな草の根コミュニティの催しであったことがわかる。「和解のための夕食会」には、100年前に暴動の被害に遭った中国系、日系コミュニティの人々に加え、被害をもたらした側の労働組合の代表者も参加した。また夕食会のオープニングは、現在バンクーバーとなっている土地にもともと暮らしていた先住民族の代表が「歓迎」の言葉を述べることで始まり、夕食会中に行われた座談会でも、中国系、日系、南アジア系、労働団体、公教育関係者、先住民などの代表者が壇上に上がり、歴史やカナダの現状に関するそれぞれ感慨や問題意識などを述べ、意見交換を行った。言い換えれば、サイモン・フレーザー大学で行われた学会は、バンクーバーの様々なエスニック団体や労働団体が参加して企画したバンクーバー暴動百周年記念行事のなかで、アカデミアが担った一翼だったのである。

バンクーバー暴動を記念するこの一連のイベントを企画したのは、バンクーバーの多様なコミュニティ団体とアジア系カナダ人研究者たちが連合した「Anniversaries of Change (変化の記念年)」と題されたボランティア・グループであった³⁾。「Anniversaries of Change」は、カナダに住むアジア系にとって歴史的に重要な四つの出来事が起こった年がいずれも7で終わっていることから、2007年をカナダにおけるアジア系の歴史を振り返る年とするために結成された。ちなみに四つの出来事とは、1907年のバンクーバー暴動、1947年のカナダ市民権法制定、1967年の新移民法の導入、そして1997年の香港の中国返還である。1947年に制定されたカナダ市民権法は、それまで英国臣民であったカナダ市民に対してカナダ市民権を法的に確立するものだったが、これを制定する際にアジア系の人々をカナダ市民に含めるかどうかについて激しい議論が交わされた⁴⁾。最終的にアジア系の市民権が確立されたことは、カナダが市民構成のレベルで「白人主義」を脱却したことを示す画期的な出来事であった。また同年にブリティッシュ・コロンビア州(BC州)で、それまで投票権を与えられていなかった中国系と南アジア系住民の投票権が認められている⁵⁾。1967年移民法では、移民の割り当てから出身国や人種の要素が取り除かれ、家族再会や英語運用能力、専門技能などを基盤とするポイントシステムが導入された。この後、カナダは高い学歴やカナダに必要な技術を持った大量のアジアからの移民を受け入れることになった。1997年の香港の中国返還は、香港からの移民の動向に決定的な影響をもたらした。返還前の十年間には香港からの大量の移民が流入し、カナダ西海岸の経済のみならず、その景観を大幅に変化させた。返還後もバンクーバーはカナダにとって環太平洋地域への玄関口であり、中国系移民の資本と人口の動向には極めて敏感であり続けている。「Anniversaries of Change」のアカデミック部門での主要な最初の催しは、2007年3月にUBCで開催された「Refracting Pacific Canada: New Directions in Research on Citizenship, Race and Migration (別の角度から見る太平洋カナダ—市民権、人種および移動に関する研究の新方向)」と題された学会であったが、ここでは、上記四つの歴史的出来事に関する、数多くの研究発表やワークショップが行われた。そして、9月に開催されたカンファレンスは、この3月のイベントの続編として、より1907年反アジア暴動に焦点を合わせる形で開かれたものであった。

2007年はカナダのアジア系歴史研究にとって、もう一つの大きな進展を見た年でもあった。同年夏に、過去四十年近くにならってアジア系アメリカ人研究に関する論文発表の場を提供してきた*Amerasia Journal*が初めて、アジア系カナダ人研究に関する特集号を刊行したのである⁶⁾。

特集号は、歴史分野からUBCおよびUCLA准教授のHenry Yuを、文学分野から台湾の国立清華大学准教授のGuy Beauregardを編者に迎え、文学、歴史、アート、クリエイティブ・ライティングなどの分野から論文を集めた。「Pacific Canada: Beyond the 49th Parallel（太平洋カナダ—北緯49度線を越えて）」と題されたこの特集号は、単に北緯49度線の北に住むアジア系の人々の体験を語るのみならず、アジア系カナダ人研究がアジア系アメリカ人研究にもたらす学問的貢献と挑戦、アジア系カナダ人研究をアジア系アメリカ人研究のような形で大学内に組織化することの是非、トランスナショナル研究の重要性と問題点など、アジア系アメリカ人研究の学問的パラダイムそのものを問いなおすような論考が含まれている。

アジア系カナダ人研究の結集と発展を目指した二度にわたる国際学会の開催、および*Amerasia Journal*での特集号の刊行は、これまで歴史学、文学、アート、クリエイティブ・ライティングなど、別々の学部に分散していたアジア系カナダ人研究が、アジア系アメリカ人研究をモデルとして、一つの研究分野としてまとまりつつあるという動きを反映し、またそれを加速するものであった。ここ数年の間に、アジア系アメリカ人研究プログラムで訓練を受けたアジア系カナダ人若手研究者たちがカナダ各地の大学で職を得るようになっており、それまで白人中心で保守的であったカナダのアカデミアのなかで、一定の存在感を示すようになってきているのである。将来アジア系カナダ人研究という分野が確立していったとすれば、2007年はそれが著しく可視化した年として記憶されることになるだろう。

さて、筆者は3月と9月の両方の会議に招かれ、アジア系カナダ人研究の飛躍の瞬間を目の当たりにするという幸運にあやかることができた。アジア出身の研究者として、日本のアジア系カナダ人研究の動向に関する情報を提供する目的で筆者が学会に招かれたこと自体が、カナダのアジア系カナダ人研究のトランスナショナルな関心と姿勢を反映していると思われる。そこで、本稿では、9月の会議プログラムを紹介することで、今日のアジア系カナダ人研究が進めようとしている、カナダの人種関係にとっての「ローカル」と「グローバル」を有機的につなぐ、新たな知識体系の構築への試みを見るとともに、筆者が学会の中で担った、1907年バンクーバー暴動に関する日本語文献の整理と分析を行うことにしたい。

1. 「1907年人種暴動とその後—太平洋カナダの百年」の学会プログラム

初日9月7日の学会プログラムは、学会のテーマと目標が全体セッションで紹介されることで幕を開けた。その後、歴史をテーマとしたパネルAとジェンダーをテーマにしたパネルBが同時開催された。パネルAでは、ビクトリア大学(UVic)のアフリカ系カナダ人学生Meleisa Ono-Georgeが1838年から1917年の英領ギアナにおける契約労働者の統制と抵抗について、コロラド大学助教授のSeema Sohiが、バンクーバー暴動の二日前に起きたワシントン州ベリンガムのインド人排斥暴動とバンクーバー暴動に対する南アジア系コミュニティの反応とインドにおける反植民地運動との関連について、そしてウェスタン・ワシントン大学のPaul Englesberg教授がベリンガムとバンクーバーの暴動を北米太平洋岸北西部地域のアジア人排斥運動の文脈の中で関連付ける発表を行った。パネルBでは、トロント大学講師のHijin Parkがアジア勃興の時代におけるカナダのアジア女性に対するオリエンタリズムについて、UBC学生のHui-Ling Lin

がアジア系レズビアン映画祭に関して、同じくUBCのJane Leeがバンクーバーのコリアタウンに住む女性の意識に関する調査を発表した。

続いて行われた学会の基調シンポジウムは、UVicのJohn Price教授が「1907年暴動の起源」について労働史と人種関係の観点からの発表を行った。続いて筆者による発表「Views from the Other Side: Japanese Community's Reactions to the Vancouver Riot (反対側からの視点：バンクーバー暴動に対する日系コミュニティの反応)」となったが、この内容については後に詳述する。三人目のパネリストはオタワ大学のTimothy J. Stanley教授で、自らの中国系とアイルランド系のハバとしての経験も交えながら、中国系カナダ人が日常の人種的暴力に対してどのように対処してきたのかを歴史的に考察した。

午後のセッションでは、ベリンガム／バンクーバー暴動についてのより詳細なリサーチの発表を集めたパネルCと、「女性、抵抗、文化／コミュニティ活動」と題された座談会であるパネルDとが同時並行して行われた。パネルCにおいては、UBC学生のNoreen Maがバンクーバー暴動の被害を調査したウィリアム・ライオン・マッケンジー・キング率いる委員会の報告書をもとに、被害を受けたコミュニティの声を掘り起こした。続いて、オーストラリア国立大学のJudy Maxwellが、同じくキングによるチャイナタウンの被害調査の記録を分析し、調査自体に含まれた人種偏見の問題点を浮き彫りにした。ベリンガムのコミュニティ活動家David Cahnは、ベリンガムにおける暴動と米国で制定された1924年移民法との関係について考察した。さらに、UBC学生のWoan-Jen Wangは、台湾、香港、アメリカ、イギリス、およびカナダで発行された中国系の新聞に掲載されたバンクーバー暴動に関する記事を発掘し、英字新聞とは異なる記述について発表を行った。パネルDでは、バンクーバーの中国系コミュニティの活動のなかでも、特に歴史的記述に表れにくい女性が果たした重要な役割について、実際の体験者も含めて報告がなされ、意見交換が行われた。

同日の最後のセッションは、バンクーバー暴動がもたらした対外的影響についての歴史的考察を行ったパネルEと、アジア系カナダ人運動の過去、現在と未来について理論的に考察するパネルFが同時並行して行われた。パネルEでは、ビクトリア在住の二世で歴史家のMidge Ayukawaが、バンクーバー暴動の結果として日本とカナダの間で取り交わされた紳士協定（ルミュー協定）で導入された、日本からの移民制限が日系コミュニティに与えた影響について概観した。UVic学生のSimon Nantaisは、ルミュー協定を日・英・加の関係のなかでとらえ直し、カナダがイギリス帝国主義のなかで外交の独立を求める一つの要因としての移民制限の問題に光を当てた。ケベック大学モントリオール校のGreg Robinsonはバンクーバー暴動に対するフランス系カナダ人の反応について、人道主義と民族主義の交錯の観点から発表を行った。パネルFではUBC講師のChris Leeがアジア系カナダ人研究とアジア系アメリカ人研究の境界について、同じくUBCのLarissa Laiがアジア系カナダ人の労働運動について、SFU助教授のKirstin McAllisterがアジア系カナダ人研究のトランスナショナル化について、それぞれ発表を行った。

二日目の朝のセッションでは、UVicの教授および名誉教授陣によって、カナダにおける中国系の歴史に関する三つの発表が行われた。中国出身のZhongping Chen教授は、バンクーバーのアジア人排斥運動においてキリスト教の牧師が重要な役割を果たしていたことに着目し、当時の牧師らの反中国人感情が1900年に北京で起こった義和団事件によって極めて激化したことと

の関連性を指摘した。BC州のアジア人排斥運動の歴史に関する三部作で知られる Patricia E. Roy 名誉教授は、1947年から1967年までの間にカナダが次第に中国系移民への門戸を開いていた過程を、家族を呼び寄せるために運動した中国系の苦闘を交えながら説明した。David Chuen-yan Lai 名誉教授は、中国系移民がカナダの都市景観に与えている様々な影響について都市社会学の立場から解説を行った。

午前後半のセッションは座談会形式をとり、「先住民連絡委員会」,「(中国系に課された)人頭税に対する補償要求委員会」,「全カナダ日系人協会」,「駒形丸事件保存基金」などを代表するコミュニティ活動家が、それぞれの立場からカナダの歴史を振り返り、活動報告を行った。昼食をはさんだ午後の座談会でも、アジア系カナダ人研究やアジア系カナダ人運動に携わることの倫理的・教育的・社会的・政治的意義と困難な点などについて、意見交換が行われた。

少し長くなったが、学会プログラムの内容全体を記載したのは、この学会が歴史の実証と人種・フェミニズムなどの理論、ローカルな特異性とグローバルな帝国主義との相互関連、アカデミアとコミュニティの対話など、これまでインスティテューショナルな構造のなかで分断されてきた異なる分野の人々を集め、アジア系カナダ人の体験を総合的に考えようとしていたことを明示するためである。実際には、歴史と理論のセッションが同時並行的に置かれていたので、両方をまたぐ対話は物理的に難しい面もあったが、学会全体として分野の壁を越えようとしている意図は非常に有効に機能したと言える。また、筆者にとってより興味深かったのは、バンクーバー、ベリンガム、台湾、日本、北京、インド、ギアナ、ロンドンなど、世界の様々な地域がバンクーバー暴動に関する議論のなかでつながっていたことである。複数言語および地域に関する知識を一同に会することで、暴動を引き起こし、また暴動の結果生まれた様々な歴史的現象、すなわち人の国際移動、帝国主義、外交・国際関係、労働関係、家族・ジェンダー、そしてそのすべてに関わる文化の問題について、新しい見方や捉え方の可能性がいくつも生まれたことは間違いない。2007年は終わりを告げたが、今後アジア系カナダ人研究から既存のボーダーを崩すような研究が出てくることは大いに期待できるだろう。そのなかで、日本発の研究の可能性について考えることが、このプロジェクトに関わる上での筆者の役割である。そこで、今回の学会でも発表を行った、バンクーバー暴動に関する日本語文献の整理と分析について、次に論じたいと思う。

2. 日本語文献に見られるバンクーバー暴動

日本の日系カナダ人研究において、1907年のバンクーバー暴動は、必ず一度は言及される有名な事件である。それはこの暴動が、日加関係史上初めて日本人のカナダへの移民制限が導入されるきっかけとなった出来事でもあり、また、アメリカ史のイメージと比べるとどちらかと言えば平和的と見られてきたカナダの歴史において、暴動という直接の暴力行為が日系コミュニティに対して加えられたというのは、当事者のコミュニティにとっても、また日系人史を振り返る研究者にとっても衝撃的な事件であったからだ。しかし、バンクーバー暴動そのものを扱った研究というのは、さほど多いわけではない。バンクーバー暴動に関しては、日加関係史の立場から1980年代に飯野正子、高村宏子によっていくつかの論文が出されており、また日本

人カナダ移民史の立場から佐々木敏二が批判的考察を行っている。少し時間をさかのぼると、1975年に初版が刊行された新保満の『石をもて追わるごとく』に、英語文献およびオーラルヒストリーをもとにした社会学的研究がある。研究者による記述は以上が主なものであるが、当事者の記録についてもそれほど数があるわけではない。日系コミュニティのなかに残っている記録として暴動の詳細な記述があるのは、中山訊四郎編『加奈陀同胞発展大鑑』のみであるが、この記録も暴動発生から10年以上経過した後に当時を回想して書かれたものである。暴動当時バンクーバーで発行されていた日本語新聞『大陸日報』はこの時期の部分が現存していないため、暴動発生当時の文献は英語新聞および日本で報道された暴動関連の記事に頼らなければならないのが実情である。

以上のように史料的制約がある中ではあるが、今回バンクーバー暴動に関する日本語文献を整理してみて興味深かったのは、それぞれの筆者が各々の立場によって、暴動に関する多様な記憶を記述していたことである。そこでこのセクションでは、暴動の記憶の多様性を概観することによって、バンクーバー暴動のもった重層的な意味を明らかにし、日本人の国際移動を考える立場から、百年後にこの事件を再考することの学問的および政治的意義を考察してみたいと思う。

2.1 日加関係史から見たバンクーバー暴動

まずは、これまで英語文献によって作り上げられてきた主流の歴史観に最も近いと思われる、日加関係史あるいは外交史の視点から見たバンクーバー暴動について取り上げる。上でも触れたとおり、日加関係史の立場からは、1980年代に飯野正子、高村宏子らが数本の論文を発表しているが、そのなかで飯野の業績はその後単行本としてまとめられている。そこでここでは、1997年に出版された飯野正子『日系カナダ人の歴史』（東京大学出版会）のなかの第二章「ヴァンクーヴァ暴動とルミュー協約 一九〇〇年代」（pp.27-59）の内容を紹介することとする⁷⁾。

この章は、暴動の原因、暴動後の日加関係、暴動に対するアメリカ合衆国の反応と日英米加の外交関係における動きについて記述している。暴動に対する筆者の姿勢と関心事項を明らかにするために、この章の導入部分を少し長いが引用しよう。

一九〇七年九月七日夜、ヴァンクーヴァ市の日本人街および中国人街が暴徒の襲撃を受けた。暴動につきものの焼き討ち、略奪、リンチは起きず、死者もなく、日系人の負傷者は二人にすぎなかった。しかし、この事件は、カナダにおける日系人の歴史のなかで重要な意味を持つ。この暴動の翌年、日本とカナダは、日本人移民の制限に関する紳士協約、いわゆる「ルミュー協約」を締結し、日本からカナダへ向かう移民には数的な制限が課されることになる。つまり、この暴動はカナダの日本人移民制限政策の導火線となったわけで、カナダにおける日系人の歴史の第一期はこれによって終わるのである。本章では、ヴァンクーヴァ暴動が日系人の歴史においてどのような意味を持つのか、そしてルミュー協約によって日加間の移民問題がどのように解決されたのか、あるいは、されなかったのかを考察する。同時に、そこにみられたアメリカ合衆国のかかわりにも注目したい⁸⁾。

暴動の暴力性については軽めの言及に抑え、移民問題が日・加・米の国際関係にいかに関与を与えたかに注目するという、外交史家らしい問題の立て方である。

バンクーバー暴動の直接の原因は、従来の学説においても、1907年8月に結成された「アジア人排斥同盟」バンクーバー支部が組織した反アジア移民集会とパレードであったことが指摘されている。「ホワイト・カナダ」をスローガンとした労働組合、排日・中国人排斥活動家、政治家などが白人バンクーバー市民に呼び掛け、市公会堂で東洋人移民の全面停止を訴える集会を9月7日の夕刻に開催した。集会に詰めかけた数千名の人々は公会堂に入りきらず、建物前の道路で州総督ジェームズ・ダンズミアをかたどった人形に火をつけて燃やした。これはダンズミアが、自ら所有する炭坑に中国人や日本人労働者を多数雇用していたことに加え、BC州議会が可決した東洋人移民制限を含んだ1907年移民法に拒否権を発動したことへの、市民の反発であった。公会堂の中では、英帝国を築いたのは「純アングロ・サクソンの血属」であり、東洋人の移民停止の必要性を訴える演説が次々に行われた。集会は予定通り、東洋人移民停止を含む新しい移民法の成立を連邦政府に訴える決議を採択することで終了したが、公会堂の外にたむろしていた群集の一部が、すぐ近くにあった中国人街へと移動し、商店に投石を始めた。その後群集は暴徒と化し、なだれを打ったように中国人街の家屋および商店に投石を繰り返し、さらに中国人街の北側に隣接していた日本人街へと移動して、日系人経営の商店や家屋に投石を行ったのであった。中国人街および日本人街への襲撃は、夜半まで3回ないし4回行われ、窓硝子や商品の破損などを中心に、両コミュニティに甚大な被害をもたらした。

この事件に関して、飯野が特に注意を向けている点は、暴動を誘発した要因としてのアメリカ合衆国の排日運動の影響である。暴動はアメリカ人が扇動した排日運動によって引き起こされたという主張は、イギリスおよびカナダの現地新聞において一貫して行われていることであるが、飯野はこの事実を、アメリカの排日運動にそれまで批判的であった英政府が面目を失うことなく、「カナダの政府および国民を非難することなく、同時に、同盟国である日本を傷つけることなく、自己の立場を擁護するために」選んだ一種の責任転嫁であったことを一方で認めつつ、この主張には「かなりの真実が含まれていた」ことを指摘している⁹⁾。事実、暴動を引き起こすきっかけをもたらした集会を組織した「アジア人排斥同盟」は、1906年に日系学童隔離事件を引き起こしたサンフランシスコで組織された「日韓人排斥同盟」（1905年設立）の流れを汲んだ、「日韓人排斥同盟シアトル支部」の関係者が呼びかけて作ったものであった。「アジア人排斥同盟バンクーバー支部」の会長は、アメリカ国籍を持つアーサー・W・フォンレインであり、9月7日の市公会堂での演説者には、シアトル日韓人排斥同盟事務局長アーサー・E・ファウラー、シアトルAFLのW・ヤング、そしてH・W・フレーザー牧師などのアメリカ人が含まれ、その他、ワシントン州労働総同盟支部長フランク・コッテリルやシアトル中央労働評議会のジョージ・リッシュマンといったアメリカ人も出席していた。したがって、この事件が起こった背景には、アメリカ西海岸で展開されていたアジア人排斥運動が国境を越えてカナダに輸出されたという面が否めないのである。さらには、バンクーバー暴動の二日前の9月5日、ワシントン州ベリಂಗムで南アジア系の労働者が白人暴徒に襲撃されるという事件が起こっている。この事件は、南アジア系住民全員がこの町から退去するという結末で幕が引かれたが、ファウラーは9月7日の演説会において「(南アジア系の) 低劣な労働者のために食卓のパンを

奪われ、子どもたちの衣服が失われたため」やむなく白人たちが決起したのだと述べ、ベリンガムには「今夜一人のヒンズーも影をとどめない」という事実を、暴動の成果としてたたえるような発言を行っている¹⁰⁾。

しかし同時に飯野は、暴動そのものは集会者の予定したものではなく、投石などの暴行を働いたのは基本的にカナダ人であったことを強調する。実際、この暴動に指導者はおらず、暴行は組織された労働者ではなく、市中心部にたむろしていた若者による投石がきっかけとなって生じたことは、史料がほぼ一致して述べている通りである。むしろ、集会の指導者たちは、集会後に街頭に出た際、暴動が繰り広げられていることに仰天し、「電信柱によじのぼり『解散、解散』と絶叫した」者もいたという¹¹⁾。すなわち、暴動は自然発生的に起こったというのが事実だと思われる。

さて、飯野はこの後、この夜の出来事の詳細には触れず、論を暴動後の日加関係へと移している。まず、日本外務省の反応として、飯野は、外務省が暴動前において排日運動の拡大を認識しながらも緊迫感に欠けていたことを指摘している。この理由は、日英通商航海条約にカナダが加入しており、したがって日英同盟下ではカナダ政府が日本人移民を排斥する法律を成立させることはないという安心感を日本政府が持っていたことにある。実際この時期、BC州議会が移民排斥法を成立させるたびに連邦政府によって反故にされるということが繰り返されており、9月7日の集会も、西海岸の人々がBC州のアジア人移民問題の深刻さを連邦政府に理解させるために組織されたと言っても過言ではなかった。そして飯野によれば、日本政府のカナダ政府に対する信頼感は、バンクーバー暴動発生後も基本的に変わらなかった。日本政府はオタワとロンドンに対して遺憾の意を表明し、日系人が被った直接的被害に対して損害賠償を要求したものの、日英の信頼関係に従い、事が平和的に解決されるよう「カナダ政府に処理を一任」したのである¹²⁾。これに対し、カナダ政府は即刻に被害調査を行い、同年11月末までに、被害者に対し総額9,175ドルの賠償金を支払った。このことをもって、日本政府はこの事件を解決とし、カナダ側の迅速かつ誠意ある対応に対して「深い満足と感謝の意」を表した¹³⁾。

しかし、暴動が日加関係に及ぼした影響はこれにとどまらなかった。暴動から一ヶ月後、BC州における日本人移民問題を日本政府と話し合うため、労働大臣ルドルフ・ルミューが日本に派遣され、やがて日本政府との交渉の結果、日本からの新たな労働移民を年400名に制限するというルミュー協定（紳士協定）が締結されることとなった。

ここまでの顛末は他の文献でも言及されているが、飯野の業績のなかで特筆すべきは、バンクーバー暴動に対するアメリカ合衆国の反応を丁寧に記述している点である。1906年のサンフランシスコ日系学童隔離事件以来、日本の政府、世論ともに合衆国に対する感情は悪化していた。それとは対照的に、日本とカナダとは日英同盟や日英通商航海条約によって信頼関係を保っており、イギリス政府もアメリカの排日運動について批判的な態度をとっていた。ところが、バンクーバーでの暴動の発生は日英の間に緊張を生み、アメリカ人にとっては、むしろ英連邦国家においても太平洋岸では同じような反日感情が存在することを日英両国民に知らしめる良い機会となるということで、内心歓迎されたのである¹⁴⁾。その後アメリカは、日本からの移民の流入停止に関してカナダ政府と歩調を合わせようと、カナダ、イギリスと交渉を試みるが、この時点ではそれは成功しなかった。しかし飯野は、カナダのローリエ首相がアメリカのセオ

ドア・ローズベルト大統領の要望に応え、北米の日本人移民問題に関してイギリスが日本政府に働きかけるよう英政府に要請することに合意したことを重視している。このもくろみはイギリス政府の拒否によって失敗に終わるが、飯野によれば、ルミュー協約をカナダが日本との間で独自に締結したことは、移民問題を通じてカナダが英政府から独立した外交を行うきっかけをもたらし、またカナダが次第にイギリスよりもアメリカとのつながりを重視するようになっていく一つの契機ともなった。そのような意味でも、バンクーバー暴動とその後の日加関係の変化は、カナダの外交史のなかでも重要な意味をもっているのである。

以上のように、外交史家から見たバンクーバー暴動は、日・英・米・加の間の国際関係にとって大きな転換点をもたらす大変重要な出来事であった。この指摘は非常に重要なものであるが、国際関係史の記述には、バンクーバー暴動が実際に被害を受けたコミュニティにとってどのような出来事として体験されたのかという、当事者の声は反映されない。バンクーバー暴動の実態を知るには、実際に現場にいた人々による記録を見るが必要となってくる。先にも述べたとおり、日系コミュニティ内部の同時代の記録というのは極めて限られているが、事件当時バンクーバーにいた日本国領事が詳細な報告を外務省に送っている。そこで次に、日系移民史の立場から外交文書を発掘し、バンクーバー暴動が発生するまでの経緯を詳細に再現した、佐々木敏二による記述を紹介したいと思う。

2.2 日系移民史から見たバンクーバー暴動

カナダに渡った日本人移民の歴史について、日加両国に存在する史料を丁寧に発掘し、再現したことで知られる佐々木敏二は、著書『日本人カナダ移民史』（1999）のなかで、一つの章をバンクーバー暴動に割いている。第四章「ハワイよりカナダへの転航移民と晩香坡暴動」（pp.149-189）は、暴動の原因をバンクーバーに到着した日本人移民数の急増に見出し、その主要な要因であったハワイからの転航移民について詳しく分析している。

本章の主眼点は、1907年の晩香坡暴動の最大の原因となった布哇転航移民がなぜ大量にカナダに到着することになったのか、その背後にあったハワイ斎藤幹総領事や日本の外務省のカナダ転航を肯定視する見解と現地の排日運動の現状から転航移民を阻止しようとする晩香坡森川領事の見解の対立、晩香坡暴動の実情、それが与えた日本人社会への影響を、当時の事情を記している数少ない日本語の資料である外務省外交史料館所蔵の史料、中山訊四郎編『加奈陀之宝庫』（1921）、中山訊四郎編『加奈陀同胞発展大鑑・附録』（1922）などを使って明らかにしようというものである¹⁵⁾。

そもそも、バンクーバーにハワイから日系人が転航してくるようになった原因は、アメリカ合衆国政府が1907年3月、ハワイ、カナダ、メキシコからアメリカ本土への移民の流入を禁じたことにあった。『日本外交文書』によれば、1906年にハワイに渡った日本人移民18,187人のうち、67.2%にあたる12,227人はアメリカ本土に転航し、17.9%にあたる3,352人は日本へ帰国、ハワイに残ったのは2,708人に過ぎなかったという¹⁶⁾。すなわち、この時期ハワイに渡った日本人移民の大部分は、アメリカ本土への転航を最初からもくろんでいたということが言える。と

ころが、カリフォルニアの排日運動に应ずる形で、連邦政府がハワイ経由で本土へ移民する道を断つたため、ハワイの移民ブローカーが、新しい移民送出先としてバンクーバーを選んだのであった。ハワイのブローカーが労働者3,000名をバンクーバーに送ろうと手配しているという情報を得たバンクーバー領事森川季四郎は、1907年4月16日、林薫外務大臣に電報を送り、BC州議会でアジア系移民制限法が議論されている現状への「影響は少なくない」と警告を発している。しかし、これに対し林外務大臣は、日英通商航海条約がある限りカナダに日本人移民の上陸を拒否することはできないという理由から、特に行動はとらないよう命じた。結局2月から5月の間に667名の日本人がハワイからバンクーバーに到着し、そのほとんどが上陸を許可された。

バンクーバーの状況を一挙に緊張させたのは、7月に1,177名の移民を載せてハワイから航海してきたクメリック号の到着であった。これに関しても、森川領事は再三再四、外務省およびホノルルの斎藤幹総領事にハワイからの出航を阻止するよう要請を出しているが、ハワイの領事館と耕主組合の制止活動は功を奏さず、渡航を思いとどまったのは200名に過ぎなかった。こうして7月25日、千名を超える日本人が一挙にバンクーバーの港に下りてくることになり、埠頭には排日運動家や政治家、白人労働者がつめかけるといふ事態に至った。

ここで佐々木が丁寧記述しているのは、クメリック号の到着に対するバンクーバー日系コミュニティの反応である。当時カナダ全土でも日系人の数は約5,000名であることを考えると、1,000名を超える移民の流入のインパクトがいかに大きかったかは想像に難くない。当時の混乱を、森川領事が外務省に次のように報告している。

当市日本人旅館は僅かに三百数十名を容るの余地を有するに過ぎず去りとて一旦上陸したるものを棄て置き候ては却て白人等に排斥の口実を与うるが故残余のものは之をスティブストン日本人漁家に送り一時雨露を凌がしむる事とし同夜数台の電車を借り入れ約八百之をスティブストンに送り一時其の影を潜めしむる事に致し候、然るに転航者の中には十数名の脚気患者有り他に十数名の各種患者ありたる為め之又相当の加護を要し其重きものは在内地日本人漁者団体付属病院に入れ治療を加えしめ候得共二名は遂に死亡し候¹⁷⁾。

結局、着の身着のまま船から下りてきて雨露をしのぐ場所もない同胞たちに救いの手を差し伸べるべく、バンクーバーの「日本人宿舎組合」とスティブストンの「フレーザー河日本人漁者慈善団体」が協議し、800名がスティブストンに送られ、漁者たちが一人50セントを徴収して宿を提供することになった¹⁸⁾。病人の治療も一ヶ月は漁者団体付属病院が無料で引き受けた。この時にスティブストンの人々がどのような思いでハワイ転航者を受け入れたのかは、後に『須知武士道漁者慈善団体三十五年史』で詳しく紹介することとする。

佐々木の著作は、この混乱のなか漁者団体理事の鯖戸由松がハワイの斎藤総領事に送った、転航阻止を請願する手紙を引用している。それによれば、すでにカナダでの生活を確立しつつあったスティブストンの漁者たちは、一度に大量の上陸者があると白人労働者が脅威に感じ、排斥運動が激化するので、「徐々に百余の同胞を送らるること得策と存じ候」と述べている。これに対し、斎藤総領事は非常に憤慨し、逆に、ハワイから純良勤勉な農民が転航に走るのにはバ

ンクーバーの旅館業者や漁者団体が勧誘、誘導するからだとして、「傲慢不遜」な返書を送った¹⁹⁾。事態をより悪くしたのは、ハワイ転航移民に加えて、1907年には日加用達会社を通じて1,600名の鉄道労働者や炭鉱労働者が渡航する計画がすでにあり、5月から8月までに766名が渡航を終えていたことである²⁰⁾。このような急激な移民の増加と、それに伴う現地の排日運動の激化を目の当たりにしていた日系コミュニティや現地の領事の警告を無視し、無為無策を続けた外務省の役人が、バンクーバー暴動を招いたのだとして、佐々木は非難の矛先を基本的に日本外務省に対して向けている。

そしてバンクーバー日系コミュニティは、ついに9月7日の暴動の日を迎えた。佐々木の著作では、暴動の実態について、森川領事が外務省に送った詳細な報告書を4ページにわたって引用している。さらに、カナダ政府が行った被害調査報告書をもとに、日系各商店がいかなる被害を受けたか、その種類と賠償請求額を一覧表にして全部掲載している。それによれば、パウエル街、ウエストミンスター街を中心に61箇所の商店や住宅の窓ガラスが破損し、賠償請求額は、直接被害が2,405.70ドル、間接被害が11,113.75ドルであり、結局そのうち、賠償金9,036ドルに、損害要求手続き費139ドルを加えた、合計9,175ドルが日系コミュニティに支払われた。

佐々木は結びのなかで、日本の外務省が基本的に海外移民奨励派であって、ハワイ経由で日本人移民の北米大陸への促進を目指していたことを最大の問題と論じている。外務省の海外膨張主義が、現地の排日に苦しむコミュニティの事情を無視することにつながったというのだ。エリート外交官の海外膨張論と、現地における摩擦の責任を移民に押し付ける態度こそが、移民の苦勞を生み、さらには排斥運動を激化させ、やがては移民制限につながったこと、そして、彼らの国益重視の政策が「棄民政策」であったことを指摘して、佐々木は論を結んでいる。佐々木の業績は、当時の外交官をはじめとするエリートと、実際に海外に暮らす移民たちとの視点のずれ、日々排斥や差別と闘い、助け合いながら生きていく移民たちの姿を映し出したという点で、日系移民史として大変貴重なものである。

一方で、佐々木の視点に問題がないわけではない。排日運動が北米西海岸で高まる中、外務省の無策は、暴動を防げなかった理由としては重要と言えるだろうが、暴動そのものの原因とまでは言うことができない。暴動を引き起こした本当の要因を明らかにするためには、やはり当時の北米西海岸の労働関係と人種関係、日・英・米の三つの帝国の周縁であるこの地域で構築されていった「ホワイテネス」イデオロギーの詳細な分析が必要であろう。この分野はまさに現在進行中の研究であり、2007年に行われた暴動に関するカンファレンスのような形で今後も研究の交流を続けていくことによって、より暴動の総合的な姿が見えてくるものと思われる。

2.3 オーラルヒストリーから見たバンクーバー暴動

次に紹介したいのは、オーラルヒストリーを1970年代という早期から行い、現在では集められない貴重な聞き取りに基づいて初期の日本人カナダ移民の生活を生き生きと描き出している、新保満『石をもて追われるごとく一日系カナダ人社会史』のなかのバンクーバー暴動に関する記述、第二章「草分けの頃 IV ヴァンクーヴァー暴動」(pp.35-50)である²¹⁾。新保は社会学者であるが、本書の初版は1975年に出されており、当時は「ホワイテネス」や「帝国」といった分析枠組みでアジア系排斥運動の説明は行われていなかった。しかし、新保のBC州における

東洋人排斥の構図の説明は、今から見ても、カナダの「ホワイトネス」イデオロギーの劣等感と優越感の入り混じった特質を見事に言い当てている。そこで、少し長いですが、暴動の原因となったBC州白人の東洋人排斥感情に関する本書の説明を引用することにする。

BCがなぜ東洋系を毛嫌いしたかを検討しよう。(中略) BCは、カナダ東部から切りはなされ孤立していた。(中略) 一八八五年迄BCから一番ゆきやすい英領植民地は香港だった。このような地理的隔絶により(中略) BCの白人は、BCはカナダの一部でありながら単に利用されるだけで実質的には無視されている感じをもった。さりとて、英国王室に忠誠心の厚い人々が多かったので、英国王室に反抗して独立した米国人をこころよく思っていなかった。彼等は英国系による英国的生活様式の維持を当面の理想とした。しかしこの理想は余り現実的ではなかった。英国の立派な人士が(中略) ラッコ船の基地か千古の大森林のはしにチョココンとたっている製材所位しかないBCに第二の故郷を求めてくるだろうか。大抵の人達はもっと開けた所におちついた。たまにやってくるのはこちらで御免蒙りたいような変な連中だった。これにひきかえ、極東からはいとも簡単にBCにくることができる。極東の国の人々(中国系や日系)がBCにふえるのは理の当然だった。ところがこれがBCの白人には気に喰わない。「カナダは白人のパラダイスであるべきだ」というのがこの人々の考えだったのである。そこへノココやってきた東洋系に対して彼等は強い反感をもった。そしてそれまで心にわだかまりをもっていた米国人との関係を一応水に流し、(中略) アメリカ人と提携して仲良く東洋系を排斥することにしたのである²²⁾。

このように、帝国の周縁にいて、ヨーロッパや北米東部の主流社会では「白人」^{ホワイト}に入れなかった人々が、西海岸においてアジア人排斥を積極的に展開したという議論は、最近のホワイトネス研究などではしばしば指摘されている点である。新保はまた、カナダ人の名士と言われる人々のなかで東洋系排斥に関与した人々には長老派信徒が少なくなったことを指摘し、例として、ウィルフリッド・ローリエ首相、ルドルフ・ルミュー労働大臣、ウィリアム・ライオン・マッケンジー・キング労働次官(後の首相)などを挙げている。バンクーバー暴動においても、長老派の牧師などが公会堂でアジア人排斥の演説を行っている。長老派キリスト教徒が当時のカナダで東洋系排斥を積極的に行う理由があったのか、あるいはなかったのか、ホワイトネスとの関係や、中国において反キリスト教運動の様相を強く帯びた1900年の義和団事件との関わりなど、さまざまな要因から解明していく必要があるだろう。

さて、新保の著作の真骨頂は、1970年代に収集された日系一世たちのオーラルヒストリーの数々である。このため、1907年の暴動に関しても、他の著作とくらべると格段に具体的であり、また生々しい描写となっている。もちろん、本書に集められている記憶は、事件当時から何十年も経った後のものであり、日本人の勇猛果敢さをドラマチックに描く、日系コミュニティのなかですでに伝説化されたストーリーであることを忘れてはならない。しかし、新保は暴動に関して事実関係が異なる証言を丁寧に集めており、またコミュニティ内部の声を拾ったという功績は過小評価されるべきではないだろう。

新保が集めた暴動の目撃者の証言によれば、一度目の襲撃において、市公会堂に入れなかつ

た群集の一部が暴徒化し、中国人街で投石を繰り返した後、日本人街になだれ込み、投石を行った。このときに、被害の大半が生じた。その後、二度目の襲撃に備えて、日系移民たちは自衛の手段をとったが、そこには二つの異なる証言がある。一つの証言は井上兼吉から取られたもので、それによれば、日本人街の自衛は帝国領事館書記生吉江三郎が主導した。

吉江は井上を含む若い者を伝令として一軒一軒に「又暴徒がくるとあぶないから女子供は家の奥にひっこんでいるように」とふれてあるかせた。それに、九月初旬だから、漁期が終りスキーナ河から引きあげてパウエルでゴロゴロしておる独身のいきのいい若い衆が沢山いる。この魚とりたちをあつめて自衛隊とした。まず石やレンガを集めさせ、それを川崎商店の屋上に「武器」として積み上げた。又、中年者を救護班として組織し負傷者の手当を担当せしめ、一部婦人に炊き出しをさせて自衛隊の連中に飯を喰わせた²³⁾。

一方、平野芳太郎の証言によると、コミュニティの自衛を主導したのは、当時バンクーバー宿舍組合長をしていた中山訊四郎であった。

中山が威勢のよい当時の日系人間でも一きわ肝のすわっていた青山米吉にたのんで警戒委員長になってもらい、若い者に石をあつめさせて川崎商店の屋根につみ上げた。一方、若い衆を武装させ、ウエストミンスター街とゴア街の間の小さな路地「小便横丁」に待機させた。大河原茂一という老人の如き、日本刀を腰にぶちこんで大張り切りだった。第二回目の暴徒がやってきた。夜の九時半頃である。刀をふりかざしたりステッキをもってまち構えていた日系人の自衛隊がウエストミンスター街におどりでてきた。(中略)白人に二人程負傷者がでたので暴徒はびっくりしてにげだした。屋根の上の石はついに投げずじまいった²⁴⁾。

これらの証言によれば、暴動の際の日系コミュニティには、先に挙げた先行研究の記述とは対照的に、かなり物騒な雰囲気が漂ったことがわかる。さらに、二つの証言のずれについて敢えて憶測するために、暴動の一週間後に森川領事が外務省に送った報告書の内容と照らし合わせてみよう。森川によれば、日系移民たちは「非常に激昂」し、「日本刀短銃及ジャックナイフ等を用意」して、暴徒が再び来襲した際には大打撃を与えようと準備していたという。そこで領事館は「其不心得を論し」、事態を鎮静化させるため、暴行に抵抗する場合は「正当防衛の範囲」に止めるよう伝えた。しかし、夜12時ごろに起こった第四回の暴徒来襲では、日本人は「抜刀して暴徒の群中に斬り入り其数名を傷つけた」ので、暴徒は非常に狼狽して逃げた。その後も暴徒は二回の襲撃を試みたが、日本人および警官の警備が厳しく日本人街には近づくことができず、この夜は事がおさまったということである²⁵⁾。すなわち、現場に駆け付けた領事館職員は警戒と自重の両方を邦人に促したが、日系人たちのなかには手荒な行動に出た者もいた。そして、暴動の記憶が日系コミュニティのなかで伝説としてストーリー化されていくなかで、勇猛果敢に戦った美談となっていったものと思われる。

さて、この「日本人は勇敢に戦って白人暴徒を追い返したのに対し、中国人は襲撃に対して

無力であった」という定説は、バンクーバー暴動に対する主流社会の記憶においても、日系コミュニティの記憶においても共通している。中国人がなぜ暴徒に抵抗できなかったのか、あるいはしなかったのかという点も、今後さらなる考察を要する話題である。一つの興味深い記述が、森川領事の報告書にある。それは、「支那人街に於ては目前に一人の暴行者あり三人の巡查之を目睹し居り乍ら何等の処置を為さずして看過したるの類は当館職員が目撃したる処」というものである²⁶⁾。それに比して、日本人街は最初の一、二回の襲撃では警察は頼りにならなかったものの、その後の襲撃は警官がかなり厳重に警護した。このあたりから、同じアジア系であっても政府の対応が、恐らくは日ごろから異なっていたことが考えられる。いずれにせよ、中国系コミュニティのこの事件に対する声が日本、カナダのどちらにおいても十分に拾われてきていないので、これも今後のアジア系カナダ人関連共同研究の課題としなければならない。

以上のように、新保の著作は、まだ事件の体験者が生存していた時期にオーラルヒストリーを集めたことから、事件の当事者の生き生きとした記憶が記述され、大変貴重な史料となっている。事件当時の領事館の記録と合せると、史実の面からもかなり正確であることがわかる。しかし一方で、事件の語られ方が外務省文書と多少ニュアンスがずれていることなども、日系コミュニティ内部の記憶とアイデンティティを考える点からも興味深いものがあると言えよう。このことについては、次のセクションでさらに考察する。

以上のように、社会学者として日系カナダ人コミュニティを早期に調査研究の対象とした新保の功績は極めて大きい。しかし、新保の業績も二次資料である点は否めず、当事者の声を完全に代弁するものとは言えない。そこで本稿の結びとして、当事者による暴動関連の記憶をいくつか拾ってみたいと思う。ここでも興味深いのは、同じく当事者であっても、その置かれた立場によって、暴動の記憶にかなりのずれが見出せることである。

2.4 当事者の記憶

2.4.1 外交官から見たバンクーバー暴動

まずは、暴動当日バンクーバーにいた外交官が、後に記録したバンクーバー暴動に関する記述を紹介しよう。北米西海岸の日系移民問題について視察するために外務省通商局から派遣され、当日バンクーバー入りした石井菊次郎による回想である。先に言及した森川領事の報告書が暴動後一週間という時期に書かれているのに対し、石井の記述は、1967年に鹿島平和研究所によって編集された『石井菊次郎遺稿—外交随想』という書物に含まれたものである²⁷⁾。これは、1890年に外務省に入省し、各国大使、国際連盟日本代表などを歴任して、「石井—ランシング協定」でも有名な石井菊次郎の遺稿を死後に編纂したものであり、したがってバンクーバー暴動について言及されている第五十三章「大和民族の勇敢性」(pp.295-300)がいつ頃書かれたものであるのかは、この書物だけでは明確ではない。しかし、この記述は暴動の史実よりもその記憶として興味深いものがあるので、ここで参照することとする。

石井は、外交官として世界各地を巡るなか、世界史的に重要な騒乱にもいくつか遭遇している。1900年に北京で義和団事件に遭遇、1907年にバンクーバー暴動に巻き込まれ、1912年にはバリ全権大使として第一次世界大戦の勃発の第一報を東京に送った。ちなみに石井の最期は、1945年5月25日の東京空襲で行方不明となり、死亡が推定されている。上述の史料は、義和団

事件、バンクーバー暴動、そして第一次大戦勃発でパリがドイツ軍に包囲された際のいずれの場合も、うろたえ逃亡したヨーロッパ人、中国人などとは対照的に日本人が勇敢に危機に立ち向かったことを回想し、それを大和民族の優秀性として讃える内容となっている。

大和民族は仕合せにも叙上勇気果敢性の持主である。我国が列強と伍して今日の地位を獲たるは叡文武なる天皇の御稜威の下に国民がその勇気果敢を發揮して遺憾なかりしに職由するものである。(中略) [バンクーバー暴動発生時には]突差の間に居留民男女挙つて一団となり自衛するに決し、婦人はビールの空瓶に沙灰を詰め男子は夫を携へ或は棍棒を手にして日本街の入口に列を為し、町内一步も群衆を入れしめざるの策を講じた。労働党は四千余に上る大勢であつたが、此勢に辟易し町内に侵入するを敢てせず、遠方より瓦石を投ずる程度の狼藉に止まつたが、我居留民は夫すら仮借せず、投石者は見付け次第に打倒し、警察へ連れ込むべき態度を示し、其所に若干の乱闘があつたが、群集は我居留民の決然たる態度の前に退却して終に隣りの支那街を攻撃するに至り、憐むべし自衛の決心を欠如したる支那人は商店と否とを問はず一律に破壊せられ、鮮からず負傷者まで出したと云ふ。(中略) 後にて聞けば損害賠償として市官憲より五万弗の支払を受けたる由なるが、実は損害の微々たりしに比し巨額の見舞金を受けたる訳にて、為に小学校を始め日本人倶楽部など案外の利益に浴したりと云ふ。単り物の哀を留めたるは支那人にて彼等は頗る大なる実害を蒙りながら何等の賠償にも陳謝にも与ることは克はずして泣き寝入りとなりたりとの事であつた²⁸⁾。

この文章は、当時の緊張感をよく伝えており、暴動の史料が限られている中で貴重な記述ではあるが、民族優越主義、中国人に対する偏見などを如実に反映しており、また史実に関してかなりの誤認がある点は大きな問題である。事実の確認をしておく、暴徒は最初に中国人街を襲い、その後日本人街へとやって来たため、二度目の襲撃などでは日本人のほうが防衛準備をしやすかったといわれている。また、中国人は暴動の最中に日本人のような組織的抵抗を見せなかったのは事実のようであるが、カナダ政府は中国人街への被害調査を行い、損害賠償も行っている。中国人コミュニティの暴動への反応については、研究が始まったばかりであるが、2007年の学会で発表を行ったWoan-Jen Wangは、世界各地の中国語新聞における暴動関連の記事を調査し、その結果をウェブ上で公開している²⁹⁾。それによれば、中国人コミュニティを実質的に統制していた互助組織「中華会館 (Chinese Benevolent Association: CBA)」が、「白人に暴行を受けた者は、当会に申し出れば、こちらで交渉します」等の通達を出しているという。CBAはカナダ政府との賠償の交渉窓口も務めており、石井が言うようにまったく無為無策で泣き寝入りしたわけでは決してなかった。

日本人の勇ましさを強調する回想をしている石井であるが、暴動当時の記述に登場する石井の日系コミュニティに対する発言は、むしろ暴力を自重し、事件の解決を日本政府と英国およびカナダ政府との間の外交交渉に任せるようにと邦人を諭している³⁰⁾。これは、森川領事の行動とも共通しており、外交官として当然の行為であったといえるだろう。石井は事件後、カナダ政府との賠償交渉などにも活躍して重要な役割を果たしたことも、ここに付記しておきたい。

2.4.2 バンクーバー日系コミュニティから見たバンクーバー暴動

次に、バンクーバー暴動に関する日系コミュニティ内部の最も詳しい史料、中山訊四郎編『加奈陀同胞発展大鑑』の内容を紹介する。この本は原版が1929年に刊行されており、佐々木敏二解題・解説『カナダ移民史資料』の第8巻として復刻されている³¹⁾。編者である中山訊四郎は茨城県出身の一世で、バンクーバー宿舍組合長を務め、仏教会創立メンバーとしても活躍するなど、いわゆる日系人コミュニティ・リーダーの一人であった。『加奈陀同胞発展大鑑』は、1920年代を通じて執筆されたカナダ日系コミュニティの名士録および発展過程をつづった書物で、一説によれば、BC州における日系人選挙権獲得法廷闘争を行った本間留吉など、複数の著者によって執筆されたようである³²⁾。本書の第十四編「排斥問題―排日運動の具體化」(pp.1067-1090)には、20世紀初頭のBC州の排日運動の経過がつづられており、バンクーバー暴動に関しても詳細に記述されている。

『加奈陀同胞発展大鑑』は、排日運動が明治30年(1897)年前後に発生し、白人労働者たちがアジアからの移民を阻止すべく、新移民法(ナタル法)を成立させるよう州議会に働きかけていたことなどを詳述している。1907年9月7日の白人労働者およびアジア人排斥運動家の集会についても、恐らくは英語新聞の情報をもとにしたものだろうが、演説者の名前および演説内容などを含む非常に詳細な記述がなされている。本書が挙げる暴動の原因は、日系人との競争を恐れた白人労働者と、彼らの支持を受けた排日政治家・代議士たちが付和雷同し、排日をBCにおいて政治問題化していたこと、さらにその背景には、ダンズミア州総督をはじめとする資本家たちが、ストライキを繰り返す白人労働者よりもアジア人労働者を好んだことに対する反発があったこと、などである。暴動の初日から、その後の数日の出来事、そして賠償金の支払いまでの経過も詳しく記録されている。事件より10年以上経過した後の回想ではあるが、暴動の夜の描写は極めて臨場感あふれるものである。

亜細亜人排斥同盟会の一隊は七日夜日本人街及支那人街に殺到して暴行を演じ、為に両街各商店の窓硝子は一枚も余さず破壊せらるるの惨状を呈し、日本人街のみにて其損害約1万余弗に上れり。彼等の暴行は前後四度繰返され、其第一、第二回までは邦人共に拳を握りて忍耐し居たるも、第三回の襲撃に至りて、遂に警察力の頼む能はざるを知り、各自護身用の武器を執って起ち、余儀なく防御の手段に出でざるべからざるに至り、端なくも格闘はパウエル、ウエストミンスター街角に演ぜられ、短銃連発の響き、白刃の閃めく光りは街頭高く掲げられたる電燈に映じて凄惨言語に絶し、突貫の叫び、劍戟の音と和して、悲惨なる修羅の巷を現出せしが、日本人は遂に首尾能く彼等を撃退し、重軽傷者数名を出さしめて凱歌を奏するに至りしが、第四回の襲撃は更に数百名の労働者に依って行はれしが、彼等は二三の破壊を企てたる後、脆くも撃退されしがその集団は尚容易に解散せざるより、邦人側にありては相当自衛の方法を講ぜざるべからず、即ち防衛隊を組織して万一に備へ、夜を徹して警戒に努めたり³³⁾。

暴動翌日も日系人は警備を怠らず、その日は平穏に過ぎたが、翌々日の9月9日夜には、日

本人街がバラード湾に面する位置にあったヘースティングス製材所と、隣接する日本人国民学校が白人暴徒に放火される事件が起こった。どちらも発見が早かったためボヤ程度で収まったが、学校が狙われたことで、移民たちは急いで国民学校にかけられていた御真影を警察署へ避難させ、その後領事館に安置した。暴動後数日内の動きとしては、警察およびコミュニティの人々が警護を続ける一方、領事をはじめ領事館職員が人々に自重を呼びかけ、また、9日には緊急に邦人大会が招集されて、「茲に在留同胞一同は今回吾人の受けたる暴戾なる迫害と大屈辱とに對し帝国臣民としての威信と體面とを保持せん爲め協力一致以て難局に當り時態の解決を期す」という決議文を採択した³⁰。『加奈陀同胞發展大鑑』はまた、石井菊次郎通商局長の談話を詳細に載せているが、その内容は、外交ルートで交渉を進めているので、それを阻害するような暴力を振るうことは帝国臣民としてふさわしくなく、また国際関係上まずいという形で、移民コミュニティの自重を促すものであった。

このように『加奈陀同胞發展大鑑』の記述は、暴動関連の史実のみならず、バンクーバー日系コミュニティの歴史的記憶やアイデンティティについても考察する材料を提供してくれる。暴動当日に日系人たちが勇猛果敢に戦ったことはその後のコミュニティの美談になっている一方で、史料の行間からは、まだ移民初期の出稼ぎ労働者のコミュニティの荒くれた雰囲気も伝わってくる。また、女性たちの活躍が記述されていることも興味深い。中山をはじめとするリーダーたちが、当時世界の一等国として認められようと躍起になっていた外交官たちと一緒にあって、「帝国臣民」としての威信と品性を訴える姿も、なかなかいじらしいものがある。文体も格調高く、明治日本人の気概が伝わってくるような史料である。

さて、佐々木敏二が初期の日本人カナダ移民の出身県と職業・居住地域の関係について詳しく分析をしている。それによれば、バンクーバーのパウエル街を中心に栄えた日本人街は、ヘースティングス製材所などの労働者やBC州のその他の地域で働く労働者のための一時逗留先としての下宿屋、彼らのための各種サービス（風呂屋、食堂、飲み屋、散髪屋など）や各種商店などを有していたが、その人口の多くは滋賀県人によって占められていた。一方、バンクーバー市の南を流れるフレーザー河が太平洋に注ぐ河口にあるスティブストンは、和歌山県人を中心とした漁業コミュニティであった。同じ日本人移民でも、出身地、職業、方言などの異なるバンクーバーとスティブストンのコミュニティであるが、暴動関連の史料のなかにも、両コミュニティの人々の意識の違いを見ることができる。そこで最後に、スティブストンの人々がこの事件についてどのような記憶を残しているかを分析することとする。

2.4.3 スティブストン日系コミュニティから見たバンクーバー暴動

ここで紹介する史料は、小林貞二『須知武士道漁者慈善団体三十五年史』のなかの「布哇よりの轉航者續々上陸」(pp.163-166)という短い章である。『須知武士道漁者慈善団体三十五年史』は、原版が1935年に刊行されたもので、復刻版が先述の『カナダ移民史資料』（不二出版）の第4巻に収められている。詳細な中山の記述に比べ、わずか3ページのこの章には、1907年7月のクメリック号の到着によって、ハワイからの転航者をスティブストン漁者団体が受け入れることになったいきさつが次のように述べられている。

[伏見貞愛親王]殿下をお迎ひした頃から翌七月にかけて、市民を驚かしたのは、例の布哇轉航者の上陸であつた。後から後からと、續く轉航者に、面喰つたのは加奈陀の人々ばかりではなく、又日本人も同じ様な状態に置かれた。何十人となく續く彼等は、晚香坡には収容する餘地がなかつた。中にはシー・ピー鐵道の橋下に寝なくてはならぬとされた者も幾人あつたか知れなかつた。

そこで關係者はステヴストン團體に何んとかして貰ふより外に方法がないと云ふので、代表は送られた。此の頃の團體責任者は下野氏を團體長に、病院監督が吉田愼也氏であつた。代表の説く所は熱心であつた。同じ大和民族を棄て、置くかとその人々は云つた。帝國臣民を橋の下に寝させて置いて、君達は黙つて見て居られるかとも云つた。兎に角團體責任者は、大和民族と帝國臣民とを澤山にきかされて結局

一、在晚香坡日本人宿屋組合は捨白頓収容新渡航者より各五十仙宛を徴収して當團體に納入すること

二、當團體の附属病院は無料にて診察及投薬の義務を有す。但し入院患者の實費及死亡者の葬儀料は宿屋組合にて支出するの義務を有す。(中略)

四、患者の入院期間一ヶ月を超過するを得ず。診察投薬又同じ。

五、期間超過後は必ず宿屋組合にて引受くる事を要す。

(中略)と云ふ様な契約書を取交はし、四百餘名を送り込まれたのであつた³⁵⁾。

この文の記述にある、バンクーバーから送られた代表とは、宿舎組合長の中山訊四郎である。事実関係として、森川領事の報告書が800名送ったと書いているのに対し、この資料が400余名と記録しているずれが気になるころではあるが、それ以上に目を引くのは、日系アイデンティティをめぐる、これまで紹介した史料との温度差である。バンクーバーで困っている同胞を助けるよう中山から説得を受けたスティブストンの団体責任者が、とにかく「大和民族と帝國臣民とを澤山にきかされ」た挙句、しかたなく轉航者を受け入れることに合意した、という口調が、外交文書やバンクーバーの側から見た中山の史料の真剣さと比して、なんと滑稽である。引用部分に続き、この史料には9月7日の暴動に関する記述が3行にわたってある。それによれば、暴動は漁者団体にとっても「重大なる關係を有する」ので、副団体長がバンクーバーに出向き、必要があれば漁者を全員救援に送ってもよい旨を伝えた、とのことである。

暴動当時のスティブストンの漁者たちはかなりの衝撃をもって暴動を受け止め、また危機を迎えた同胞に手を差し伸べたのであろうが、漁者団体の史料が1935年に出されたものであるとはいえ、やはりその記述があまりにもあっさりしていることは、スティブストンでは暴動は歴史的記憶としてはあまり重要な位置を占めていないことを示していると言わざるを得ない。また、語が使われているニュアンスからは、これらの漁民たちが、バンクーバーの移民と比して、どこまで「大和民族」「帝國臣民」というアイデンティティを内在化していたのか、多少の疑問がわいてくる。近年、日本史の分野においても「海の民」と「陸の民」のアイデンティティの違いについて新たな見方も出されてきており、日系移民史の観点からも、漁民とその他の移民との国際移動に対する姿勢などが異なることが研究によって明らかになりつつある。スティブストン漁者団体の史料は、一方で移民の「本音」を表しているようで非常に興味深い、それ

だけでなく多様な日本人の国際移動を考える際にも、貴重な材料を提供してくれるものであるう。

おわりに

バンクーバー暴動は、カナダにおけるアジア系の歴史の大きな転換点として、アジア系カナダ人にとっては現在でも大きな意味を持っている。暴動の発生によって、カナダ政府は初めて西海岸における日本人排斥運動を深刻な政治問題として受け止め、それまでBC州から提起されるたびに無視し続けていた、数による移民制限を導入した³⁶⁾。このことは中国人への人頭税の導入とともに、BCにおけるヨーロッパ系の人口の優勢および政治的優位を決定づけた。また、暴動の事後処理を通じ、カナダが対アジア関係においてイギリス帝国とは利害を異にすることが明らかとなり、このことはカナダが外交における独自の政策を打ち出すきっかけともなった。暴動百周年の記念行事を共有したことは、暴動で被害を受けた日系と中国系コミュニティをつないだのみならず、「和解」のためのイベントを通じて、多様な人種・民族がカナダの歴史とともに振り返り、BC州の成り立ちについて批判的再考を行う機会を提供した。

学問的観点から見ても、バンクーバー暴動は、多様な問題を考察する材料を提供してくれる。暴動の原因や結果を分析すると、日・英・米・加の帝国の競合と交渉の重要な局面を垣間見ることができ、また北米西海岸の「白人」イデオロギーの構築の一つの分水嶺を観察することになる。そして、暴動の多様な記憶を対比することによって、異なる形で国際移動した人々の異なるアイデンティティや世界観に光を当てることにもつながるのである。

現地に残された史料に限りがあり、事件を直接体験した人々のオーラルヒストリーを収集することが不可能な現在、バンクーバー暴動に関してさらに研究を進めるためには、バンクーバー以外の場所に史料を発掘する必要がある。現在進みつつある研究としては、世界各地の中国語新聞を調べている Woan-Jen Wang の研究があるが、同じような研究として日本語新聞の関連記事の調査が有効であろう。その他の可能性としては、移民から本国に送られた手紙等が残っていないかなどの調査も可能性として考えられる。今後の研究課題としては、まず日本語新聞記事の調査を行い、当時の日本の世論の暴動の受け止め方について探るとともに、北米で進展しているアジア人排斥関連の研究の新しい方向性についても、引き続き注意を払っていきたいと思っている。

注

- 1) この学会および関連イベントに参加するために、科学研究費補助金基盤研究A「環太平洋地域における日本人の国際移動に関する学際的研究」より渡航費補助を受けたことを、感謝とともに付記しておく。
- 2) 「駒形丸事件」とは、1914年に日本船籍の「駒形丸」で香港からバンクーバーに到着した376名のシーク教徒を中心とした南アジア系の人々がカナダへの上陸を許可されず、二ヶ月港に停泊した後にインドへ送還された事件。
- 3) 「Anniversaries of Change」についての詳細情報は、URL<www.anniversaries07.ca>を参照せよ。
- 4) Patricia E. Roy, *The Triumph of Citizenship: The Japanese and Chinese in Canada, 1941-1967* (Vancouver:

University of British Columbia Press, 2007).

- 5) プリティッシュ・コロンビア州では、中国系、日系、南アジア系住民は、出生地、帰化しているかどうかなどに関わらず、選挙人名簿に登録を許されなかった。1947年に中国系と南アジア系住民の投票権が認められたが、第二次大戦中に太平洋岸から強制移動させられた日系人は、1947年当時、まだ太平洋岸への帰還を許されていない。彼らがバンクーバーに戻れるようになったのは1949年4月1日のことである。
- 6) Henry Yu and Guy Bearegard (eds.), "Pacific Canada: Beyond the 49th Parallel," Special 2007 Issue of UCLA's *Amerasia Journal*, Vol.33: 2 (2007).
- 7) Vancouver の日本語表記は「バンクーバー」「ヴァンクーヴァ」「晩香坡」など、多様な可能性がある。本稿では、文献を引用する場合には原表記を用い、その他の箇所は「バンクーバー」とする。カナダ、ハワイ、スティブストンなどの地名に関しても、同様の原則をとる。
- 8) 飯野正子『日系カナダ人の歴史』、東京大学出版会、1997、29頁。
- 9) 前掲8) 32-33頁。
- 10) 中山訊四郎編『加奈陀同胞発展大鑑』、1929、1068頁（『カナダ移民史資料 第8巻』、不二出版）。
- 11) 新保満『石をもて追われるごとく一日系カナダ人社会史』、御茶の水書房、1996、46-47頁。
- 12) 前掲8) 38頁。
- 13) 前掲8) 40頁。
- 14) 前掲8) 43-44頁。
- 15) 佐々木敏二『日本人カナダ移民史』、不二出版、1999、150頁。
- 16) 前掲15) 151頁。
- 17) 前掲15) 162頁。
- 18) スティブストン地域の日系漁者の団体であった「フレーザー河日本人漁者慈善団体 (Fraser River Japanese Fishermen's Benevolent Society)」は、1908年に「須知武士道漁者慈善団体 (Steveston Fishermen's Benevolent Association)」と名称変更している。これは、日系漁者のなかでカナダ国籍（正確にはイギリス臣民籍）に帰化する者が増えたため、「日本人」の語を団体名から外すべきだという議論が強くなったためである。この名称変更は、漁民たちが出稼ぎから定住へと意識を変化させたことの表れとも言える。
- 19) 前掲15) 165頁。
- 20) 日本からの契約移民の到来とバンクーバー暴動およびその後の日加関係との関連性については、高村宏子「日本人契約移民とカナダの日本人移民政策」、カナダ研究年報、第6号、1985、27-40頁を見よ。
- 21) この章は、日系一世のオーラルヒストリーとともに、英語文献Howard H. Sugimoto, *Japanese Immigration, the Vancouver Riot and Canadian Diplomacy* (1966) に基づいて、記述されている。
- 22) 前掲11) 37頁。
- 23) 前掲11) 45-46頁。スキーナ河はBC州北部にあり太平洋に注いでいる。その河口にあるプリンスルパートはアラスカとの国境に程近い。9月初旬であればバンクーバー南部郊外にあるスティブストンではまだ漁期だが、北部のスキーナ河ではすでに漁期が終了していた。温暖なスティブストンには和歌山県人を中心とした定住コミュニティが発達していたが、北部漁場に行っていた漁師たちは、漁のできない冬期はバンクーバーに滞在した。
- 24) 前掲11) 46頁。
- 25) 前掲15) 175頁。
- 26) 前掲15) 177頁。
- 27) 鹿島平和研究所編『石井菊次郎遺稿—外交随想』、鹿島研究所出版会、1967。
- 28) 前掲27) 295頁および298-299頁。

- 29) Woan-Jen Wang, "Perspectives on the 1907 Riots in Selected Asian Languages and International Newspapers," <http://www.instrcc.ubc.ca/1907_riot>.
- 30) 前掲10) 1073頁。
- 31) 佐々木敏二解題・解説『カナダ移民史料』全12冊，不二出版，1995-2001。
- 32) この情報は，バンクーバーの日本人街で育った二世Midge Ayukawaとの私的会話のなかから得たものである。
- 33) 前掲10) 1069頁。
- 34) 前掲10) 1070頁。
- 35) 小林貞二『須知武士道漁者慈善団体三十五年史』，ステヴストン漁者慈善団体，1935，164-165頁。
- 36) 中国人に対しては，カナダ政府は1885年に入国の際一人50ドルの人頭税を課した。その後人頭税は，1900年には100ドルに，1903年には500ドルに増額された。